慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

坂口記念講座
新咸臨丸プロジェクト
将来有望な５名の若手研究者がＰＩに就任

組織がアクティビティーとサステナビリティーを併せ持つためには、構成員の円滑なターンオーバーやが重要なことは論を待たない。慶應医学の108年の輝かしい歴史が脈々と引き継がれてきた背景には、先人たちがこのターンオーバーを重んじ、後進の育成に心血注いできたからに他ならない。そのような中、慶應医学の将来を支える若手研究者、特に基礎部門の有力な人材の数が、近年大幅に減少していることが指摘されている。その原因としては、社会情勢の変化は勿論のこと、21世紀ＣＯＥプログラム（２００３―２００８年）、グローバルＣＯＥプログラム（２００９―２０１３年）、テニュアトラック普及・定着事業「咸臨丸プロジェクト」（２００８―２０１２）のような若手研究者の「真水」となるような取り組みが、この12年間無かったことも一因と考える。実際、現在の慶應医学部の若手・中堅の教授においては、上記の取り組みによって育成された医師、研究者が多い。

坂口光洋記念講座は25年前に開設され、これまで須田年生名誉教授、福田恵一名誉教授、佐藤俊朗教授（現医化学教室）といった、錚々たる顔ぶれの研究者たちが講座責任者を務め、慶應医学を強力に押し上げてきたのはご存じのとおりである。一方、昨今の国による「10年ルール」の策定などにより、すべての所属者が有期契約教員であるという、現行の坂口記念講座の建付けでは、従来のようなプレゼンスを保持するのは難しい状況となっている。さらには、国からは上記のＣＯＥプログラム、テニュアトラック普及事業のような、純然たる若手育成のための支援はあまり期待できない状況である。

これらの状況を総合的に鑑みて、金井医学部長のイニシアティブのもと、坂口記念講座の趣旨を若手人材育成へと舵を切ったのが、この新咸臨丸プロジェクトである。本プロジェクトは、特に支援が不足していると思われるポピュレーション、つまりＰＩ（研究室主催者）になる直前のステージの研究者を対象としている。特に注力したのが、17年前の「咸臨丸プロジェクト」で散見された、既存教室のいわゆる「増員枠扱い」を排除し、名実共に独立、対外的にも独立研究者として認知されるような仕組みの構築である。

選考過程においては、国内外から68名もの有力若手研究者の応募があり、非常に難しい選考となった。その熾烈な競争を勝ち抜いたのが左記の5名であり、いずれも将来の慶應医学を担うに相応しい有力かつ有望な若手研究者である。すでに総合医科学研究棟2階の南側に、自分の城を築き、自身の命名した研究室名の看板を掲げている。是非とも彼らの活躍を注視していただき、ご支援賜れば幸いである。

（解剖学教室教授　久保田義顕　79回）

●坂口光洋記念講座　独立准教授（PI）

シグナル探求学講座	志甫谷　渉
分子生物情報医学講座	楠本　大
エピジェネティクス・幹細胞生物学講座	中谷　庸寿
生体内イオン応答学講座	城（渡辺）　愛理
消化器生体機能多次元解析講座	筋野　智久

シグナル探求学講座　志甫谷　渉

2025年4月より、坂口光洋記念講座（シグナル探求学）に准教授として着任いたしました志甫谷渉（しほや　わたる）です。

私は北海道札幌市に生まれ、京都大学理学部を卒業後、名古屋大学大学院創薬科学研究科で博士号を取得し、その後、東京大学濡木研究室で学振PD、特任助教、助教として研究を続けてまいりました。

これまで、Gタンパク質共役受容体（GPCR）の立体構造とそのシグナル伝達機構の解明を通じて、創薬に資する基礎研究を進めてきました。今後は、次世代シーケンサーとRNA定量技術を活用し、数百種類のGPCRに対する薬剤や代謝物の活性を一括で評価できる新しいアッセイ技術の確立に取り組みます。本技術により、既存薬の副作用や新たな作用機序の発見、さらには疾患マーカーの同定が可能となり、創薬研究の飛躍的な効率化が期待されます。

構造生物学、薬理学、情報科学を融合させたこの挑戦を通じて、GPCRを基盤とするシグナル研究を一層発展させ、社会実装を見据えた革新的な医薬品開発支援技術の確立を目指します。どうぞよろしくお願いいたします。

分子生物情報医学講座　楠本　大（86回）

私は2007年に慶應義塾大学医学部卒業後、2009年に循環器内科学教室へ入局、2019年からは予防医療センターに所属し、臨床、研究、教育に取り組んでまいりました。この度2025年4月より坂口光洋記念　分子生物情報医学講座に着任致しました。

私は今まで、AI画像解析を中心とした機械学習や、単一細胞時空間解析を中心とした生物情報学の解析手法を取り入れ、循環器疾患の病態解明や新規治療開発を行なってまいりました。臨床医学に立脚した仮説形成を行い、情報学・機械学習を用いて複雑な生命現象を俯瞰・解析し、分子生物学的手法を用いた検証を経て、最終的に臨床医学へ還元することを目指しております。ウェットからドライまでを有機的に連携させた研究を行い、医学・情報学にまたがる領域横断的な学際的研究を目指していきたいと考え、「分子生物情報医学」と講座を命名いたしました。

新しい技術を導入することで今まで見えなかった現象を捉え、循環器疾患の新規治療開発など臨床への還元を目指し、研究に取り組んでまいりたいと思います。まだまだ大変未熟ではございますが、精一杯頑張っていきたいと考えております。ご指導・ご鞭撻いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

エピジェネティクス・幹細胞生物学講座　中谷　庸寿（つねとし）

2025年4月1日付で医学部　坂口光洋記念エピジェネティクス・幹細胞生物学講座の准教授を拝命しました中谷庸寿と申します。予てから大学の研究・教育に携わりたいという強い想いを胸に秘めておりましたので、この度ご縁をいただきましたことを大変嬉しく思います。

前職では、ドイツのヘルムホルツセンターにて、受精卵だけがもつあらゆる種類の細胞に分化し、個体を形成することができる特殊な能力、即ち「全能性」の機構解明に向けた研究を行っておりました。今後も受精卵のテーマは継続・発展させていくとともに、哺乳類が進化の過程で獲得した胎盤形成に係る機構についても新たに研究を開始していく予定です。基礎医学研究の中においては少し風変わりな研究テーマを進めておりますが、医学の発展につながることは元より、将来の教科書に載るような本質的で重要な事柄の発見を目指して、慶應義塾ブランドの発展に尽力する所存です。皆様方のご指導とご鞭撻をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

生体内イオン応答学講座　城（渡辺）　愛理

坂口光洋記念生体内イオン応答学講座の准教授として参りました、城（渡辺）愛理と申します。この度は当研究室のことを皆様に知っていただく貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。

私は東京大学医学部を卒業し、内科中心に初期研修・後期研修を行った後、大学院に進み研究を始めました。大学院では、糖化ストレスを抑制する酵素Glyoxalase Iを高発現するラットから摘出した大動脈を用いて、血管機能アッセイを行っていました。その後順天堂大学でGタンパク質共役型受容体の研究を始め、重炭酸イオンに応答するGタンパク質共役型受容体GPR30を見つけて以降、自身の研究テーマとして続けてまいりました。

現在、我々の研究室では、GPR30を研究対象として、in vitroの化合物スクリーニングやマウス病態モデルの解析など、様々な研究を行っています。博士課程の大学院生2名と実験補助員1名、教室責任者（城）から構成される小さな教室ですが、和気藹々と頑張っていきたいと思います。研究室をもつにあたっては大きな責任と若干の不安を感じますが、いただいたチャンスを十分に活用して飛躍できるよう、研究に励んで行く所存です。

どうぞよろしくお願いいたします。

消化器生体機能多次元解析講座　筋野　智久（84回）

この度坂口光洋記念講座（消化器生体機能多次元解析）に就任いたしました筋野智久です。

2005年の卒業後消化器内科（日比紀文教授、金井隆典教授）、さらに内視鏡センター（緒方晴彦教授、加藤元彦教授）のもとで足掛け20年臨床と研究を行ってまいりました。特に、炎症を誘導するT-helper 17細胞、炎症を抑制する制御性T細胞による消化器疾患発症の機序解明や、腸内細菌と病気の関連について研究を行なってまいりました。さらに、一細胞レベルまで拡大した細胞の動態解析（生体内イメージング・空間トランスクリプトーム・シングルセルRNA-seq）を中心に患者さんからサンプルをいただき研究を行っております。

臨床医においてこそ、基礎的な知識や考え方などが非常に重要であり大学院生とともに学ぶ機会が必要であると感じております。さらにこれまでに知られていないものを新たに発見し報告するというワクワクする体験を一人でも多くの医学部学生・大学院生と共有できればと思います。

江戸時代末期、咸臨丸に乗船し何か得られるのではないかという福沢諭吉先生の期待や高揚感を令和の時代にも「シン・咸臨丸」の乗船で味わっていただけるように、さらには次世代の育成に努力したいと思います。

2025年 三田会会長に就任して

藤村　悠哉（104回）

今年3月より、2025年三田会会長に就任いたしました、医学部104回生の藤村悠哉と申します。身に余る大役を拝命し、背筋の伸びる思いです。

私は在学中、医学部体育会剣道部に所属すると共に、四谷自治会の会長として、学部の枠を超えたさまざまな塾生自治組織やその代表者たちと連携し、塾生のより良い学びと生活環境の構築に努めてまいりました。信濃町キャンパスに長くいると忘れがちなことではありますが、慶應義塾は総合大学として、知識の醸成にとどまらず、多様な価値観と人々との出会いの中で、互いに学び合い成長していくことのできる、稀有な学び舎であることを強く実感した次第です。

三田会は、単なる同窓生の懇親の場にとどまらず、異なる分野で活躍する塾員同士が、互いの専門性や経験、価値観を尊重し合いながら学びを深める、知的かつ人間的な交流の場でもあります。医学部の同窓会である三四会が医療界においてその役割を果たしているように、三田会には各界を牽引する錚々たる先輩方が多数在籍されており、例えば年に一度の連合三田会大会は、「気品の泉源、智徳の模範」という義塾の精神が連綿と受け継がれていることを実感することのできる貴重な機会ではないでしょうか。2025年度の連合三田会大会は、10月19日に日吉キャンパスで開催される予定です。医学部のブラックジャックセミナーをはじめ、魅力的な企画が多数予定されておりますので、ご都合がよろしければぜひご来場ください。

2025年三田会は、いまだ若い組織ではありますが、卒業という節目を共に迎えた仲間たちと力を合わせ、今後長きにわたって持続的かつ有意義な発展を遂げていくことを目指しております。

私自身、この4月より栃木県済生会宇都宮病院にて医師としての第一歩を踏み出したばかりの若輩者ではございますが、医師として日々研鑽を重ねるとともに、2025年三田会の会長という責任の重さを噛み締め、本会が、それぞれの道を歩む同期同士が学び合い、支え合える場となるよう尽力してまいります。

微力ながらも誠心誠意この任を全うする所存ですので、今後ともご指導と温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

次期塾長候補者の決定について

慶應義塾は、2025年４月28日に臨時評議員会を開催し、以下のものを次期塾長候補者として決定し、理事に選任しました。次期塾長の選定は、５月27日に開催する理事会で行われる予定です。正式な塾長の決定については、理事会終了後に改めてお知らせいたします。

塾長候補者理事：伊藤　公平
（現慶應義塾長）

百日咳で亡くなる新生児・乳児を無くしたい
―妊婦へのワクチン接種を―

渋谷区で小児科を開業している宝樹真理です。現在、百日咳が流行しており、ワクチン未接種の新生児が死亡したとの報道もあります。定期接種は生後2か月からですが、新生児に承認された百日咳ワクチンは存在せず、妊婦が接種して胎盤を通じ抗体を胎児に移行させることが重要です。母体由来の抗体は半減期6週間、生後4か月には消失します。

1950年以降、ワクチン導入により患者数・死亡数は激減しましたが、1975年に接種後死亡例が報告されDPT接種が一時中止、1979年には年間1万3000人の患者と20人以上の死亡が報告されました。私も、産科退院直後に無呼吸で緊急入院し、翌日百日咳で亡くなった新生児を経験しています。

その後、ワクチンは改良され、日本の技術は世界をリードする水準に達しました。しかしDPT定期接種では小中学生や成人の流行を防ぎきれず、諸外国では年長児への追加接種が行われています。今年は死亡例が増加する可能性があり、すでに東京での新生児死亡や福岡での重症例（ECMO導入）が報告されています。

年長児や成人への接種推奨も考えられますが、DPTワクチンは現在一社製造で供給に限界があり、まず妊婦への接種を優先すべきです。国産のDPTを妊娠28～36週に0・5㎖皮下注射するだけで、ワクチン代も安く、新生児、乳児の百日咳を防げます。

安全性・効果は厚労省研究班の報告で確認されています。慶應医学をはじめ、リーダー医療機関が妊婦接種を推進すれば、社会的認知が進み、新生児の命を守ることができると信じています。

（たからぎ医院　宝樹真理　52回）

第136回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー

日　時　2025年６月21日（土）午後３:00～６:00
方　法　ハイブリッド開催
（現地：慶應義塾大学信濃町キャンパス北里講堂
（北里記念医学図書館２階）／zoom配信）
※参加費無料・事前登録制（お申込多数の場合は先着順となります。）
※詳細は慶應義塾大学医学部のWebサイト（https://www.med.keio.ac.jp/）の『ニュース』をご確認ください。
参加対象　慶應義塾大学医学部、三四会、慶應医師会、慶應義塾大学関連・紹介病院、東京都地区医師会に所属する医師

講演会　『呼吸器外科の最新トピック』
モデレーター　朝倉　啓介
（慶應義塾大学医学部外科学教室（呼吸器）教授）

1　「漏斗胸診療の現状と今後の課題」
政井　恭兵
（慶應義塾大学医学部外科学教室（呼吸器）専任講師）
2　「胸部悪性腫瘍の最新のトピックス
～経皮的凍結融解壊死療法とゲノム検査～」
加勢田　馨
（慶應義塾大学医学部外科学教室（呼吸器）専任講師）
3　「進化する肺癌外科治療」
菱田　智之（埼玉医科大学国際医療センター呼吸器外科教授）

日医生涯教育制度参加証交付　1.5単位（カリキュラムコード：０）

お問合せ　慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課内
生涯教育研修セミナー事務局
Tel：０３-５３６３-３６１１
E-mail：med-somu-3@adst.keio.ac.jp

次回セミナー開催予定：2025年10月25日開催予定

北里記念式の挙行について

初代医学部長北里柴三郎先生の94年祭にあたり、医学部と三四会との共催により、下記のとおり北里記念式を執り行うことになりました。三四会の皆様方のご列席の程をお願い申し上げます。

記

日時　６月12日（木）午後１時～午後２時30分予定
会場　北里講堂

医学部長　金井　隆典
三四会長　武田　純三

慶應義塾医学部新聞 投稿規定

慶應義塾医学部新聞は、三四会員であればどなたでも投稿いただくことができます。

【教授・理事長就任】
・本文文字量は800字程度＋顔写真（JPEGデータなど）をお送りください。
【受賞】
・本文文字量は400字程度＋顔写真（JPEGデータなど）をお送りください。
【今月のサイエンス】
・インパクトファクター10.0以上のジャーナルに掲載された原著論文であること。
・筆頭著者、または責任著者のどちらかに三四会員がいること。
◎上記条件を満たした論文のうち数本をセレクトの上、こちらから解説文を依頼します。

「クラス会」「支部だより」「著書紹介」「読むべき３冊」「異能の人々」なども募集中！

お送りいただいた記事につきましては、順次掲載していきますが、紙面の都合により掲載号が遅くなることがあります。ご了承ください。

慶應医学部新聞編集室メールアドレス
shinbun@sanshikai.jp　←NEW！

鑑賞知来

顕微鏡は17世紀頃から現在にいたるまで形態観察の重要なツールであり続けていますが、近年顕微鏡画像を高解像度でデジタルデータ化するホールスライドイメージング（WSI）技術が実現しました。写真とは異なり、専用ソフトウェアを使えば顕微鏡と同様に視野の移動や拡大度の変更が自在にできるのが特徴です。

現在医学部の病理学ミクロ実習では顕微鏡とWSIを併用しています。感染症流行により対面授業が制限された時期にも、WSIによって自宅実習ができたのは大変助かりました。向後のためには顕微鏡操作に慣れて欲しいところ、学生はタブレットで操作できるWSIをより好むようです。WSIは病理専門医・細胞診専門医試験にも既に導入されており、典型例・希少例の貴重な標本の破損リスクや、配布された標本の薄切面によるばらつき問題を解消しています。画像を配布することなくサーバ経由で閲覧させる技術もあるため、権利に配慮しながら講習会やカンファレンスで画像を共有することが可能になりました。

この技術で最も期待されるのは遠隔病理診断でしょう。全国の病理医不足地域を救済できると同時に、WSIのみを用いた病理診断体制が構築されたミュンヘン工科大学では多くの医師が自宅で診断しているとのことですから、多様な働き方実現の可能性も含んでいます。日本でも既に平成30年診療報酬改訂でデジタル病理画像に基づく病理診断が保険収載されていますので、関連機器の医療機器承認や通信セキュリティ等の問題解決が待たれるところです。

私自身は顕微鏡を覗く姿勢になることで頭が〝診断モード〟になるため、果たしてモニタ上でWSIを見ながら診断できるのか若干の懸念がありますが、次世代の病理医はゲーミングチェアに座ってモニタに向かうのがベストポジションになるのかも知れません。

（病理学教室　新井恵吏　81相当）